地方都市リーズの「雰囲気」の醸成

――革新的社会運動から前衛美術運動へ――

Creating “Atmosphere” for a Local City, Leeds: From Radical Social Movement to Avant-garde Art Movement

要　真理子・前田 茂

KANAME Mariko & MAEDA Shigeru

要　旨

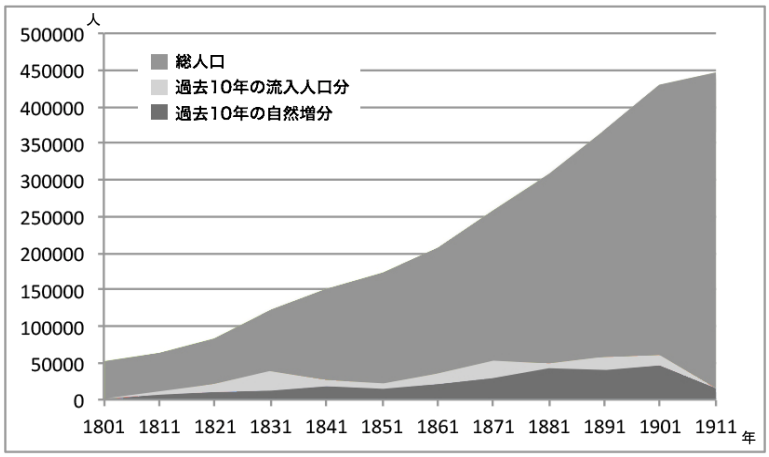
20 世紀初頭の英国では、北部ヨークシャー州に位置する一地方都市リーズが大学と地域コミュニティを基盤として新しい芸術運動の拠点として機能し、やがて首都ロンドンに匹敵する芸術文化都市へと発展した。その一因として、19 世紀末からリーズにおいて形成されてきた豊富な芸術作品のコレクションと、そうしたコレクションを媒介として育成されていった若い才能の存在が考えられる。また、蓄積された資産を地域全体の文化的な財産として活用していった点も注目に値する。本稿では、なぜ、一地方都市が時代を牽引するほどの大きな役割を果たすようになったのかを探るために、産業革命以降の革新的な社会運動から前衛的な美術運動へと展開のなかで醸成されていくリーズの「雰囲気」なるものについて考察する。

はじめに

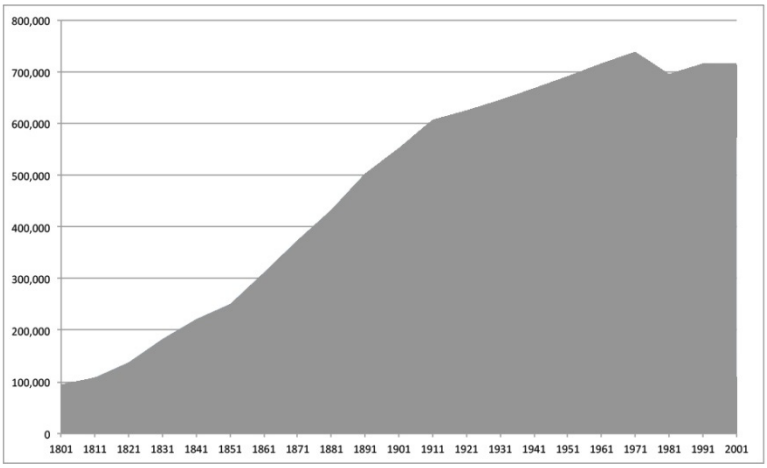
本稿は、これまで日本国内では詳細に紹介されることのなかった英国の前衛美術運動の一端を、特に「地方都市における前衛美術運動（provincial avant-garde）」としての性格が強いリーズ・アーツ・クラブ（the Leeds Arts Club, 1903-1923）の活動ならびに思想の独自性を明らかにすることを目的とした第３カ年研究課題の中間報告である。英国の地方都市リーズは、しばしばロンドン、マンチェスター、バーミンガムに次ぐ英国第四の都市と言われており、都市圏の規模としては首都ロンドンの約 18%（人口比）あるいは約 28%（面積比）程度に過ぎない。リーズ市の発展を選挙区の人口動態から見てみると（図１）、19 世紀を通じて、繊維産業の発達により他地域からの流入人口も加えて急速な伸びを見せたリーズだが、20 世紀に入ると英国全体の工業からサービス業への産業構造の変化により、リーズ市への流入は逆転し、むしろ 3 万人の流出へと転じる[(1)]。これを区域と期間を拡張してさらに大きなスパンで見てみると（図２）、20 世紀に入ってから人口増加の勢いが停止したこと

が分かる [(2)]。しかし、リーズはすぐさま産業形態を一新し、今日でも金融・印刷・観光によって英国を代表する地方都市の一つであり続けている。1921 年から 1951 年の国勢調査からデータを拾ってみると（1941 年はこの分野の調査なし）、リーズでもまた、製造業全体の労働人口がそのまま事務職へ移行したことが見て取れる（図３）。

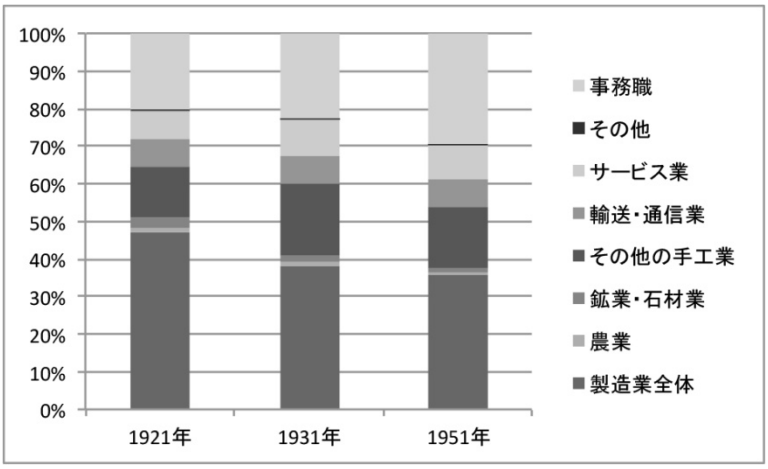
芸術文化の観点からすると、リーズは英国内のみならず世界的にも重要な都市として位置づけられる。例えば、2017 年にリーズ美術大学（Leeds Arts University）と改称したリーズ美術学校（Leeds College of Art）は、現在、リーズ大学の向かい側にあるが、かつては市の中心部、リーズ市役所の西隣に位置しており、世界的にも有名な近現代の美術作家を輩出してきた。そのうち特に有名なところでは、抽象彫刻を国際的に牽引したヘンリー・ムーア（Henry Moore, 1898-1986）の名が挙げられる。現在、市の中心部にある中央図書館と美術館を擁する建物には、ヘンリー・ムーア・インスティテュートが併設され、彫刻をはじめとする美術研究の中心であると同時に、ここでは企画展も行なわれる（図４）。また、リーズ美術学校の出身者としては、同じく彫刻家のバーバラ・ヘップワース（Barbara Hepworth, 1903-1975）、1995 年にターナー賞を受賞した現代美術の代表的人物であるダミアン・ハースト（Damien Hirst, 1965-）らがおり、一方、リーズ大学（Leeds University）の歴代の美術史教授陣には、古くはハーバート・リード（Herbert Read, 1893-1968）、クエンティン・ベル（Quentin Bell, 1910-1996）、現在はグリゼルダ・ポロック（Griselda Pollock, 1949-）という錚々たるメンバーが名前を連ねる。実際、リードの伝記を書いたディヴィッド・シスルウッドの記述通り、「リーズはロンドンに次ぐ英国前衛美術運動の中心」として認知されてきた（Thistlewood, 1984:25）。本稿では、前衛美術運動が生まれた原因がリーズの革新的土壌にあると仮定し、産業革命以降の地域的な社会運動から前衛的な美術運動への展開のなかで醸成されていくリーズの「雰囲気」について、とくに 5 人の人物に焦点を当てながら説き起こしていきたい。



（１）リーズ選挙区の人口推移（1775 年～1911 年）



（２）リーズ広域区の人口推移（1801 年～2001 年）



（３）20 世紀前半のリーズにおける産業構造の変化

（４）Henry Moore Institute（外観）

１．地方都市リーズの革新的土壌の養成：H・R・マーズデンと E・ヒートン

もともとリーズ市を含むヨークシャー地方は、18 世紀半ばに興った産業革命以降、石炭産業と羊毛・織物産業を背景に発展した地域であった。また、しばしば「ヨークシャーなまり」や「ヨークシャー・マフィア」といった言い回しに代表されるように、ヨークシャー地方はロンドンを中心とする英国文化とは一線を画する伝統を保っていると言われており、2016 年にスコットランドの王国連合からの独立が議論されるより以前の 2007 年、サッチャー首相の報道官を長く務めていたジャーナリストのバーナード・インガムは「スコットランドが独立できるというなら、同様にそうしたことが可能な行政区という点でヨークシャーも独立できる」（Ingham, 2005）と述べている。このような経済的な発展と強い独立心、そしてそれらに裏付けられた地元意識は、リーズ市のみならず、その近郊都市の人々の 19 世紀以降の性格を特徴づけていると言えよう。それゆえ、第一に挙げられるべきは、政治・経済・文化のいずれもが地域産業や地域労働者と結びついている、という点である。

とりわけリーズに関してそうした特徴を典型的に示す人物としては、リーズ市長を 2 期にわたって務めたヘンリー・ローランド・マーズデン（Henry Rowland Marsden, 1823-1876）を挙げることができる。貧しい退役軍人の家庭に生まれたマーズデンは、7 歳で繊維工場へ働きに出たため、学歴としては当時、日曜学校に通ったことがあるのみ、読み書きができるようになったのは 12 歳の時であった。他方で機械工学の基礎を独学で習得した後、15 歳の時に工具製造者の見習い工になり、過酷な労働条件ながらも紡績機械部品を発明するまでになる。この工具製造者が 1848 年に店をたたむと、マーズデンは大西洋を渡り、アメリカ合衆国コネチカット州で新型の砕石機械を開発していた会社に就職し、いくつかの改良を発案するとそのパテントを取得した。やがて 1862 年、マーズデンはリーズに帰郷し、砕石機製造の会社を立ち上げる。折しも世界各国で道路建設、鉱業、鉄道敷設が盛んになる中で、マーズデンの事業は急成長することとなったのである。この典型的な「セルフメイド・マン」のマーズデンが、アメリカから故郷のリーズへ戻った理由について、彼の伝記の著者はホームシックが理由ではないかと推測する（Bradford, 2016）。伝記の主題は裕福になったマーズデンが貧民救済事業を積極的に展開したという英雄の善的行為に置かれているのだが、しかしながらリーズ市にとって重要なのは、このように必ずしも幸福な少年時代を過ごしたわけではないとはいえ、マーズデンのような人物が帰郷したことによって、リーズには世界中から富が集まるようになったこと、そしてその富が慈善事業というかたちでリーズ域内に再投資されたこと、すなわち経済的資産の形成にある。やがて英国自由党（Liberal Party）の地方議員に選出されたマーズデンは、1872 年に市の参事会員を、また 1873 年と 1874 年にはリーズ市長を務め、3 年に 1 度開催される音楽祭を立ち上げるなどしたが、その人気は彼の陽気で寛容な性格だけでなく、彼が体現した成功物語によるところが大きかった。

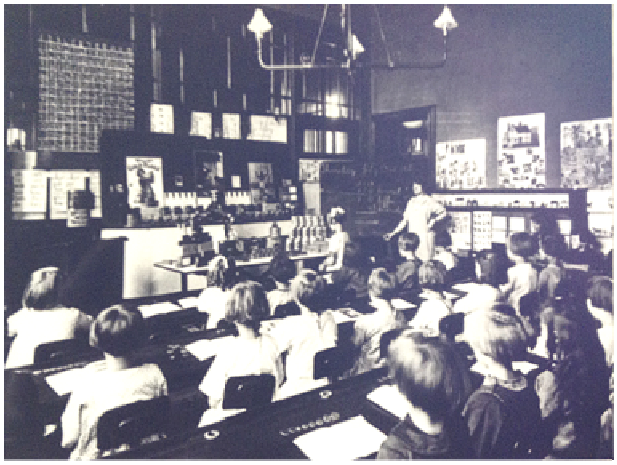
こうした労働者階級の成功モデルが彼によって提供されたことにより、リーズ周辺では、職工による新規事業の開拓が相次いだ。リーズでは服飾業の NEXT の前身（Joseph Hepworth & Son）が 1864

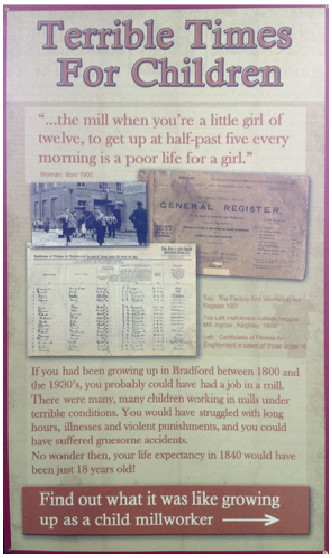
年に、工業機械のＪ＆Ｈ・マクラーレン（J&H McLaren）が 1876 年に、小売業のマークス＆スペンサーの前身が 1884 年に、印刷業から出発し、カードゲームとボードゲームの会社となったワディントン（Waddingtons）が 1896 年に、また隣のブラッドフォードでは、小売業大手のモリソンズが 1899 年に起業している。

次に挙げられるのは、女性が社会活動の中心に身を置き、積極的に文化形成に関わった、という点である。その代表的な人物が、エレン・ヒートン（Ellen Heaton, 1816-1894）と言えるだろう。彼女は、1816 年に書籍と薬品を扱う商人の長女として生まれ、当時の良家出身の女性としては一般的な教養学校（finishing school）で正式な教育を終えたものの、そのまま伝統的な家庭生活に入ることには満足せず、生来の文学と芸術に対する自身の関心を追求し始めた。その頃は公立ではなかったリーズ図書館やリーズ文学・哲学協会といった様々な学会の会員となって、尊敬する作家と文通をしたり、自らも詩作したりした。1852 年に父親が亡くなると、家業を継いだ弟とは別に、結婚する見込みのない娘への遺産として不動産と証券を相続し、以降、美術品の購入や芸術家の庇護が始まる。その際に彼女に指針与えたのが美術批評家のジョン・ラスキンであった。ラスキンの『近代画家論』に心酔した彼女は、ラスキンとの文通を通じて熱心なアドバイスを受けながら、ターナーの作品 8 点、またロゼッティの絵画作品 8 点を購入する。

1855 年にラスキンがエレンに当てた手紙からは、お世辞半分と割り引くとしても、ラスキンによるエレン評を読み取ることができる――「私はあなたと話をするのが本当に好きですし、私がこれまでに出会ったなかでもあなたのことを特に思慮深い人物だと思っています。思うに、それはあなたが私の言うこと全てを真摯に受けとめてくれるからでしょう。〔……〕あなたが知りたいことがあれば何であれ遠慮なく手紙で質問して下さい。誠実にその質問にお答えしましょう」(Surtees, 1972:160)。エレンがラスキンの助言に従って購入したターナーとロゼッティの作品は、彼女の死後にロンドン在住の甥に相続された後、現在ではロンドンのテイト・ギャラリーに譲渡された。ロゼッティはエレンと親交があり、彼の妹で詩人のクリスティーナとともにリーズに住む彼女のもとを訪問し、英国におけるリーズの文化的な地位の向上に貢献している。ラスキンとの交流は彼女の晩年まで続き、彼が支持する芸術家たちを経済的に庇護するとともに、ラスキンに促されて女性教育と労働者を対象とする大学拡張運動（university extension）の支援も行っている。特に後者の労働者教育に関しては、労働者らの入学料を全額負担するほどであり、医師として家業を継いだ弟は「ほとんど気が狂っている」と日記に書き残している（Surtees, 1972:150）。また前者の女性教育支援は、おそらくリーズという土地柄と無縁ではない。というのも、リーズやその隣のブラッドフォードでは、早い時期から女性が繊維産業や印刷産業で賃金労働に従事したことを契機として女性の就業や社会参加に注目が集まり、その結果、多くの女性教育者や女性博愛主義者が世に送り出されることとなったからである。興味深いことに、リーズとブラッドフォードは双方ともに産業博物館（Industrial Museum）を持っているのだが、その展示内容を比較すると、ブラッドフォード産業博物館では児童労働問題に焦点が当てら

れているのに対して（図５）、リーズ産業博物館ではむしろ女性労働に焦点が当てられている（図６）。そうしたリーズの土壌は、1876 年のリーズ女子高等学校（Leeds Girls' High School）の設立に尽力した女性教育活動家や、19 世紀末に過激化した女性参政権運動の活動家、通称「サフラジェット（Suffragette）」らを生み出した。なかでも有名なのは、「これは大英帝国の働く女性たちに対する政府の欺瞞への抗議である」と訴えながらロンドン塔のジュエリー・ハウスのガラスケースを破壊したレオノーラ・コーエン（Leonora Cohen, 1873-1978）であろう（Blom, 2012: 229）。また、1893 年にはブラッドフォードで独立労働党（ILP）が結成されたこともあって、19 世紀末のリーズ周辺は当時の英国で最も革新的な雰囲気が醸成されていたと考えられる。





（５）ブラッドフォード産業博物館展示

（６）リーズ産業博物館展示

２．政治運動から芸術運動への展開：A・R・オレイジ

こうしたリーズの革新的な雰囲気は、やがて政治的な運動から芸術的な動きと融合していくことになる。なかでもとりわけ中心的な役割を果たしたのが、アルフレッド・オレイジであった。1873年にリーズ近郊の保養地ハロゲイトにほど近い村の貧しい家庭に生まれたオレイジは、本来であれば12歳から働きに出ることになっていたのだが幸運にも、地元の地主に才能を見出され、引き続き師範学校（teacher's school）に通うことができ、1893年にリーズの学校に新任教師として着任した（Steele, 1990: 25）。そこで、労働者階級の劣悪な生活環境に愕然としたオレイジは、先述の独立労働党に入党してそのリーズ支部設立を支援するようになる。しかし、やがて党の集団主義と、また一方では赴任先のお定まりのカリキュラムに嫌気が差すようになり、さらに妻の影響もあって彼は神智学に関心を抱く。この頃、リーズに隣接するブラッドフォードでは、印刷業が発達していたことから神智学の大家アニー・ベザント（Annie Besant, 1847-1933）の色図版を豊富に含んだ1901年の著作『想念形体（Thought-Forms）』が印刷されつつあった。また、この頃にオレイジに訪れたもう一つの重要な転機が、ホルブルック・ジャクソンとの出会いである。

フェビアン協会に所属してフリーランスで著述業にも従事したジャクソンは、1900年に本業のレース取引でたまたまリーズを訪れたとき古本屋でオレイジと出会う（Alexander & Moran, 2013:26）。オレイジは1906年から翌年にかけて、当時では英国でもあまり知られていなかったフリードリヒ・ニーチェに関連する著書を３冊出版することになるのだが[(3)]、そもそもニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』をオレイジに紹介したのは、このジャクソンであった。そして、これらの出会いが、やがてリーズ・アーツ・クラブの設立へと発展していく。

リーズ・アーツ・クラブは、先のホルブルック・ジャクソンと、ヨーク出身の建築家で『ギルド復興（The Restoration of the Gilds）』の著者でもあるアーサー・ジョセフ・ペンティ、そしてリーズ出身のフェミニズム活動家で独立労働党の創設者の１人でもあるイザベラ・フォードらが立ち上げたフォーラムで、ホルブルック・ジャクソンの言葉によれば「ニーチェ主義のリーズへの還元」を目的としたものであった（Steele, 1990: 68）。すでにリーズには「リーズ・ファイン・アーツ・クラブ」[(4)]が 1874 年に設立されていたが、こちらが、いわば有閑階級を会員とした保守的な美術クラブそのものだったのとは異なり、リーズ・アーツ・クラブは労働者階級を対象とし、その夜間の連続講演の中心テーマは、ウォルター・ペイター（Walter Pater, 1839-1894）の唯美主義とニーチェの超人思想を融合しようとしたものであった。それによると、人間は革新的な意識変革の一歩手前まできているが、この変革を実現するためには、ILP や労働組合が求めるような政治的手段に訴えるのではなく芸術によるべきであるとされた（Steele, 2014）。おそらくオレイジの起草だとされるクラブのマニフェストには、「リーズ・アーツ・クラブの目的は芸術と観念の相互依存を肯定することにある。美から用を切り離したこと、そして用から美を切り離したことは、双方に対して長きにわたり害をなしてきたことが明らかとなった。ただ一つの明確な目的において両者を統合することによってのみ、双方の価値

を私たちに回復させてくれるのである」（Carswell, 1978:23）とあるが、ここにはウィリアム・モリス風の社会主義も見て取ることができる。1905 年の講座プログラムを見ると、クラブのスタッフは芸術家や作家とともに英国北部全域を定期的に巡回し、そこで地域の人々と討論を行なっている。

クラブの転機は、同年、ジョージ・バーナード・ショーが講演のためリーズを訪れたことに端を発する。ショーはそのとき、当時経営難にあったキリスト教社会主義の雑誌『The New Age』をオレイジとジャクソンが買収できるように経済的にも力を貸した。その結果、前衛運動を首都にも拡大したいと願っていたオレイジはロンドンへと転居することとなる。こうしたショーの支援の背景には、ジャクソンがフェビアン協会の会員であり、そこではすでにショーや先出のアニー・ベザントが重要な会員であったことが推測できる。いずれにせよ、創設者 2 人がリーズを去ったことにより、リーズ・アーツ・クラブは大きな節目を迎えるわけだが、一つ付け加えるなら、本稿冒頭で紹介したハーバート・リードはリーズ大学を卒業した後、『The New Age』誌の主要な寄稿者となる。

３．モダン・アートの育成：M・E・サドラーと F・ラター

リーズ・アーツ・クラブの前半の活動を支えた中心人物がリーズを離れた後、この町を前衛美術運動の拠点へと展開する後押しをしたのが、1911 年から 1923 年にかけてリーズ大学の副総長を務めたマイケル・エルンスト・サドラーと 1912 年から 1917 年までリーズ市美術館に学芸員として従事したフランク・ラターであった。本章では、いささか文学寄りであったクラブの性格を美術へと差し向けたこの二人の人物に注目する。

サウス・ヨークシャー州バーンズリーの急進的な思想を持つ家に生まれ、オックスフォード大学トリニティ・カレッジに進学したサドラーは、そこでジョン・ラスキンから大きな影響を受け、美術にも関心をもつようになった。やがて美術品収集家としても名を成すことになるサドラーは、ターナー（J. M. W. Turner, 1775-1851）やコンスタブル（John Constable, 1776-1837）のような英国の水彩画家ばかりでなく、フランスの画家のゴーギャン（Paul Gauguin, 1848-1903）、ヴァン・ゴッホ（Vincent van Gogh, 1853-1890）、セザンヌ（Paul Cézanne, 1839-1906）にも注目した。とくに後者については、コレクションの大部分は画商や息子のマイケル（Michael Sadleir, 1888-1957）に指南されていたように見える。息子のマイケルはロシアのヴァシリー・カンディンスキー（Wassily Kandinsky, 1866-1944）の作品を英国に紹介したことで知られている[(7)]。

リーズ大学に着任すると、サドラーは大学拡張運動を牽引した文化人たちをリーズに招へいした。また、リーズ・アーツ・クラブに入会してカンディンスキーらの前衛芸術を紹介すると同時に、1902 年に出身地ウクライナでのユダヤ人迫害を逃れてリーズに移住し、リーズ美術学校で学んでいたジェイコブ・クレイマーを支援するなど、リーズにおける前衛芸術の浸透に尽力した。

リーズを前衛芸術の拠点にしようとしたサドラーの頂点をなす偉業は、1913 年にリーズ・アーツ・クラブが主催した「ポスト印象派」展であり、首都ロンドンとほぼ同時期に地方都市で新しいアート

の動向が紹介されたという点で特筆に値する。このとき、サドラーと共同で展覧会の企画・運営に携わったのが他でもないはフランク・ラターであった。ラターは 1876 年にロンドンの 2 代続く事務弁護士の裕福な家庭に生まれ、ケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジで学び、流暢なフランス語を操るようになった（Yeates, 2008: 85-96）。大学卒業後はフリーランスの著述家としてしばらく活動した後、才能を見出されて『デイリー・メイル』紙の副編集長を勤めるとともに、『フィナンシャル・タイムズ』紙や『サンデー・タイムズ』紙などに美術批評を寄稿するようになる。1903 年に『サンデー・タイムズ』紙の美術批評担当となると、ひんぱんにパリを訪れ、当地の主要な芸術家との知己を得るようになった。この間、ラターは英国の保守的な芸術傾向に不満を感じるようになり、1908 年に芸術家連盟協会（Allied Artists Association）を立ち上げ、これを先進的な芸術作品を相互支援する場とした。その 80 名にのぼるメンバーのうち、主要な芸術家としては、ウォルター・シッカート、ハロルド・ギルマン、スペンサー・ゴアらがいた。1912 年にリーズ市美術館に着任したフランク・ラターは、自分が呼ばれた理由について、自伝的著作『Since I was Twenty-Five』のなかで、「いまだに謎である」と述べているが、実際には、1911 年の芸術家連盟協会展に出店されたカンディンスキーの作品は先のサドラーの息子が購入しており、ラター自身も「様々な展覧会において、いくつかの特に優れた作品に『リーズ市美術館購入』と明記してあるのを目にしていた」（Rutter,1927: 200）と書いているので、おそらくそこにはサドラーの取り計らいがあったのではないかと推測できる。

ところでラターの自伝には、リーズ独特の地域性と地方自治体一般の体質についての彼の見解が詳述されている。ラターがリーズ市美術館に勤務したのは、わずか 5 年間であるが、その間にロンドンの画家たちをリーズに招へいするなど、同地の芸術振興への彼の貢献は大きい。その反面、5 年間しか滞在できなかったという背景には、一筋縄ではいかない地方政治の構造が見え隠れしている。以下、当時のリーズ市美術館の運営に関するラターの記述から、地方都市リーズの雰囲気を浮かび上がらせてみたい。

まずラターは、わずかな例外を除いて「嘆かわしい」とされる地方都市の美術館の状況について、次のように説明する[(5)]。

> 地方自治体の施設は現在のところ、建前上は以下のように運営されている。すなわち、美術館評議会（Art Gallery Committee）を務めるという目的に最も適うと思われる人物を市議会が選出する。この評議会は、芸術に造詣が深いと判断された一定数の外部会員――それは参事会員でも市会議員でもない――を推挙することによって評議会自らを強化することを許可されている。評議会は「館長（Director）」や「学芸員（Curator）」と呼ばれる専門家を有給で役員に任命し、彼を美術品を購入したり展覧会を組織したりするにあたっての筆頭のアドバイザーとする（Rutter,1927: 201）。

もちろん、これは建前上の話だとして、ラターは言葉を続ける。

> 実際には、議長は、評議会の残りのメンバーが確定するよりも前に、党の集会において任命される。11月の選挙の後で、通常は市議会の各政党の長たちが協議を行い、様々な評議会の議長と副議長を互いの政党の力関係に応じて割り当てるのである。美術館評議会の議長は大抵の場合、芸術に関する知識や愛好によってよりも所属する政党への貢献度によって任命される。各政党が2名から3名の――もっと「重要な」評議会に入れるわけにはいかない――評議員を推薦し、かくして形式上は美術館評議員は正しく「選出され」たことになる（Rutter,1927: 202）。

そこから、ラターは地方自治体の美術館関係者に関して辛辣な分析を下す。すなわち、「地方においては、美術館に関する限り、芸術愛好家として国際的な名声を獲得するよりも、当地の政治的なリーダーのために便宜を図る方がましなのである」（Rutter,1927: 203）。

とはいえ、ラター自身が弁解しているように、彼はそれまで北イングランドの「工業都市」を訪れたことはなく、その評価にはいささか地方に対する侮蔑の感情が混じっていることも事実である。たとえば、次のような文章からは、日本でも見出せるような「野卑な田舎者」といったステレオタイプを読み取ることができよう。

> かつて私は春季展覧会で3名の美術館評議員を案内するよう仰せつかったことがある。彼らは、オーフェン、サージェント、ウィルソン・スティーア、ニコルソン他、傑出した近代画家の絵画作品が展示された壁の前を押し黙ったまま通り過ぎていった。一度も立ち止まることなく私たちは最後の展示室へと進んでいったが、そこは「地元の芸術家たち」、つまりは市内に住んでいる芸術家、一票を失う恐れなしにはその作品を排除する訳にはいかない芸術家にあてがわれた部屋であった。ここにいたって3名はついに一枚の肖像画の前で足を止めたのだが、それはチョコレートの箱の蓋にあるほうが似つかわしいようなものであった。魅力的な若い女性を描いたこの肖像画を前にして美的な思いに浸りながら、彼らはしばし黙って立ち止まっていた。そしてある議員が別の議員を肘でつつきながらこう言ったのである。「よォ、週末あたり［劇場やダンスホールといった繁華街で有名な］ブラックプールに行かねぇか」（Rutter,1927: 203-4）。

いかにも、モダンアートの造形表現よりも、日常の対象を連想させる世俗的な再現描写にしか興味のない――こう言ってよければ品格のない（lacking good taste）――地元の権威たちをラターは痛烈に批判している。しかしながら、ラターは決してリーズをただ嫌悪していたわけではなく、美術鑑賞

教育の点では若い世代に希望を見出していた。美術館評議会から資金提供を拒否されたため、マイケル・サドラーらの経済的支援のおかげで開催できたゴードン・クレイグの舞台美術に関する展覧会については、以下のように述懐している。

> この展覧会は開催され、そして私の期待どおりに、人気という点でも教育という点でも顕著な成功を収めることとなった。数千人の生徒たちが『ハムレット』や他の演劇の舞台美術の前を列をなして通り過ぎていったのであり、彼らの教師たちは私に対して、クレイグ氏の展覧会が若い人たちのにシェイクスピアに対する関心を引き起こしてくれたこと、そしてこれまでにないほど若い人たちの想像力を刺激してくれたことを請け負ってくれた（Rutter,1927: 205）。

また、ラターは地方自治体の美術館に対する建設的な提言を残し、サドラーや、リーズの富裕な美術愛好家からの支援を受けて市の組織から独立したリーズ美術基金（The Leeds Art fund）を 1912 年に立ち上げ、美術館評議会の決定によらない美術作品の購入の道筋を開拓している。これは美術館の一般賛助会員組織としては英国で最初のものだとされる（Ahad, 2012）。

> 市議会は、そうすることがいくらかでも利益になる限りは、彼らの美術館を支配することをあきらめようとはしないだろう。それゆえ、最初に必要なのは一定の影響力を持つほどの寄付者たちの集まりである。そして次に、有効な芸術教育のために便宜を図っている地方自治体の美術館に対しては、毎年わずかばかりの補助金を交付しても無駄ではないのだと教育委員会を納得させなければならない。そのとき初めて、私たちは地方におけるずっと良質でずっと活気のある美術館を期待することができよう（Rutter,1927: 207）。

すなわち、市民の趣味の向上に寄与し知的満足度を供給する、真の意味で開かれた美術館となるためには、美術館が地方政治の影響下から抜け出し自立する必要があったのだ。ロンドンに居を移して以降も、ラターは1917年には若干24歳のハーバート・リードとの共同編集というかたちで、美術批評雑誌『Art & Letters』を創刊するなど、リーズで育まれた新しい感性を支援した。1927年にリーズの地元紙『ヨークシャー・ポスト』で、ラターがリーズに新しい美術を紹介したことの是非に関して読者の間で論争が起こった際には、サドラー自ら彼を弁護する手紙を寄せ、そのなかで次のように述べている。

> 時が経って近代的な運動の傑作が、とりわけ新たに登場しつつある世代に対して、いっそう広い訴求力を生み出し、そして論争の霧が晴れたあかつきには、近代絵画と彫刻の

平野をずっと真実の見通しのもとで見渡すことでしょう。 地方自治体の美術館評議会は、気質においてはカトリックで、判断においては抜け目なく、全ての意見に対して公平で、趣味においては正確でなければならず、そして何かを受け入れたり拒否したりする場合にも党派的であってはなりません（Sadler,1927）。

そして、地方自治体の美術館評議会が「並外れた先見の明」と「特別な知識」を備えた者をアドバイザーとして雇用するときには、この人物の趣味に不寛容さを示すよりもむしろその判断を尊重する方がよい、と続ける。というのも、サドラーは、「モンペリエとマンハイムのような街の地方美術館や、ベルゲンの商工会議所」が、先見の明と特別な知識を備えたアドバイザーのおかげで、数年のうちに有名かつ価値あるものとなった作品群を先んじて購入できた、という実例を知っていたからである。

その一方で、リーズが芸術文化資産を形成していった歴史的経緯を振り返ってみると、重要なのはどれだけの芸術作品が手元に残ったかではなく、芸術に対する先進的な雰囲気とそこから冒頭で紹介したような多くの人材が育成されていったことのほうがいっそう重要であったことが分かる。リーズが輩出した――ハーバート・リードのような――逸材をロンドンは受け入れ、受け入れられた人物がさらに力を蓄えて、今度は教育者・支援者としてリーズに再来する。このようにして地方都市リーズと首都ならびに他の地域との人的循環と文化的連関が出来上がっていったのである。

おわりに

以上のように、産業革命以降の地域的な社会運動から前衛的な美術運動への展開のなかでリーズという地方都市がまとう「雰囲気」がどのように醸成されていったのかをそこから輩出された5人の人物の足跡を辿りつつ考察した。第一に、「セルフメイド・マン」に象徴されるように、労働者にも成功の可能性が開かれていたということ、すなわち、リーズでは、政治・経済・文化のいずれもが地域産業や地域労働者と結びついていたのである。第二に、そうした地域産業や労働者のなかに女性たちの存在があった、ということ。現在もリーズ産業博物館では、「Queens of Industry」という展覧会が開催されている（6）。第三に、隣接する地域ブラッドフォードで労働者たちが数多く参加した独立労働党という革新的な政治団体が設立されたこと。そこで、同時代のギルド社会主義、フェビアン協会などからの思想的影響と、ラスキンやペイターに代表される文学・芸術的影響が浸透していったこと。ついには、人間の革新的な意識変革のためには、政治的手段ではなく芸術によって訴えるべきだとするアルフレッド・オレイジのような人物が育っていき、リーズ・アーツ・クラブを創設することとなる。第四に、モダン・アートとの接点があったこと。サドラーのような教育者の尽力により、リーズに多くの知識人や美術品が集められる一方で、ラターのような学芸員の介入によってリーズにおいても首都ロンドンとほぼ同時に最も新しい芸術の動向を目の当たりにすることができた、ということ。サドラーとラターは多くのリーズ出身の芸術家が首都ロンドンへの橋渡しを可能にした。さらに、

留意すべきこととして、20世紀初頭における最も強力なメディア・テクノロジーとリーズとの密接なつながりを付け加えておきたい。すなわち、それは印刷産業である。雑誌やカタログという媒体によって、彼らの前衛運動は支援され広められたとも考えられる。ゆえに当然ながらリーズの試みを現代に活かそうとするのであれば、現代のメディア・テクノロジーの特性についても考慮に入れなければならないだろう。

注

＊本稿における英文からの翻訳は全て著者の手になるものであり、引用内の［］は著者による挿入である。

（1）1832 年に合併された周辺村落の人口もそれ以前の統計に算入済。1901 年から 11 年にかけては人口増加分の 83.8%にあたる約 3 万人の人口流出があった。

（2）1871 年の就労人口の減少は、1870 年から 90 年にかけての大不況と、1867 年の工場法の改正により 50 人以上を雇用する事業において若年労働者と女性労働者の労働時間が 1 日 10 時間以内に制限され、また 1870 年の初等教育法により 5～12 歳までの児童の義務教育が義務付けられたため。まさにこの 19 世紀後半をかけて、リーズでは 20 世紀の英国全体における産業構造の変化にさきがけて、それまでの主要産業であった繊維産業から機械工業や縫製産業などへの転換とともに産業の多様化が起こっている。

（3）1906 年から翌年にかけて出版されたオレイジによるニーチェ関連の 3 冊の図書の中にはニーチェのアフォリズムのいくつかを英訳したものも含まれている――Orage, *Friedrich Nietzsche: the Dionysian Spirit of the Age*, T. N. Foulis, 1906; *Consciousness: Animal, Human and Superman*, Theosophical Publishing Society, 1907; *Nietzsche in Outline & Aphorism*, T. N. Foulis, 1907.

（4）もともと、リーズ・アーツ・クラブが 1903 年にオレイジとホルブルックによって立ち上げられる以前、すでにリーズには「Leeds Fine Art Club」（以下 LFAC と略）が存在していた。LFAC の後継団体である「Leeds Fine Artists」（2010 年に LFAC から改称）のウェブサイトによれば、1874 年の LFAC 設立の背景にあったのは、18 世紀を通じての産業の拡大に伴い、それに従事する新興中流階級が勃興したことと、その文化的な関心が高まっていったことである。このウェブサイトでは、LFAC の会員らによる例会とそこでの議論は「conversazione」と呼ばれてリーズ市の文化的な生活において大きな役割を果たし、また「Philosophical Hall」で開催された年次展は地域で名が知られていたとされる（Leeds Fine Artists: 2017）。

（5）しかし、サドラーとの交流を除いては、ラターのリーズでの日々はさほど幸せなものではなく、いわゆる行政に関わる人々（評議員や参事会員）との交流に苦労したことがほのめかされている――「わずかな例外（中略）を除いて、イギリス本国（Great Britain）における地方の美術館は嘆かわしい状態にある。それらの美術館は、その維持管理に責任を追うべく選挙で選ばれた人々にとっての不名誉であり、海外から訪ねてくる芸術愛好家たちにとってのお笑い草であり、そして平均的な納税者にとっては侮辱であると同時に重荷でもある」（Rutter, 1927: 200-1）。

（6）展覧会会期は、2017 年 11 月 3 日から 2019 年 9 月まで。

参考文献

Ahad, Nick (2012), 'Celebrating a hundred years of Leeds Art Fund' *the Yorkshire Post*, the 6 July 2012.

Alexander, Neal & Moran, James ed. (2013), *Regional Modernism*, Edinburgh University Press.

Blom, Philipp (2012), *The Vertigo Years: Europe, 1900-1914*, New York: Basic Books.

Carswell, John ed. (1978), *Lives and Letters: A. R. Orage, Beatrice Hastings, Katherine Mansfield, John Middleton Murry, S. S. Koteliansky*, New York: A New Directions Book.

Ingham, Bernard (2005), 'The 50 greatest Yorkshire people?' *the Guardian*, the 13 October 2005.

Rutter, Frank (1927), *Since I was Twenty-Five*, London: Constable & Co. Ltd.

Sadler, Michael E. (1927), 'Municipalities and Art' *the Yorkshire Post*, the 30 November 1927.

Steele, Tom (1990), *Alfred Orage and The Leeds Arts Club*, Basingstoke: Scholar Press.

Steele, Tom (2014), 'From Ruskin to Nietzsche: Michael Sadler an the Leeds Arts Club' Transcript of a Lecture at Leeds University on the 3 June 2014.

Surtees, Virginia ed. (1972), *Sublime and Instructive: Letters from John Ruskin to Louisa, Marchioness of Waterford, Anna Blunden, and Ellen Heaton*, London: Michael Joseph.

Thistlewood, David (1984), *Herbert Read Formlessness and Form*, London: Routledge, Kegan & Paul.

Yeates, John (2007), *N.W.1: The Camden Town Artists— A Social History*, Curry Rivel: Heale Gallery.

参考 URL

Bradford, Eveleigh. 'Henry Rowland Marsden' *The Historical Society for Leeds and District*, The Thoresby Society, July 2016, http://www.thoresby.org.uk/content/people/marsden.php (checked 8 January 2018)

'A brief History Of Leeds Fine Artists', http://leedsfineartists.co.uk/our_history.html (checked 8 January 2018)

'Queen of Industry' A New Exhibition at Leeds Industrial Museum, http://www.leeds.gov.uk/museumsandgalleries/Pages/armleymills/Queens-of-Industry.aspx (checked 8 January 2018)

図版リスト

（1）リーズ選挙区の人口推移（1775 年～1911 年）cf. Derek Fraser (ed.), *A History of Modern Leeds*, Manchester Univ. Press, 1980, p.48.

（2）リーズ広域区の人口推移（1801 年～2001 年）cf.　'Leeds District: total population' *Vision of Britain* http://www.visionofbritain.org.uk (checked January 8 2018)

（3）20 世紀前半のリーズにおける産業構造の変化 cf. Derek Fraser (ed.), *A History of Modern Leeds*, Manchester Univ. Press, 1980, p.430.

（4）Henry Moore Institute（外観）.　撮影：著者、場所：リーズ：日時：2017 年 8 月

（5）Women working as machinists (c.1892)他. 撮影：著者、場所：リーズ産業博物館：日時：2017年8月

（6）撮影：著者、場所：ブラッドフォード産業博物館：日時：2017 年 8 月

本論文は、日本学術振興会科研費採択課題「英国地方都市における前衛美術運動――リーズ・アーツ・クラブの軌跡」（基盤研究（C）課題番号: 15K02175）の研究成果発表の一環として公開する。